



新年の句

鹽野奇香

摘取れは雲こぼる、若菜かな  
書初や袖美しき女の  
淡黒に春の句ひや筆初め  
事もなく平凡にして三ヶ日  
初東風や霞晴行く東山  
初東風や春日の鹿を遠近に  
幼兒が壁一ぱいに御慶かな  
屠蘇の香をつけて疊むや白扇  
家内中無事に揃ふて雑煮かな  
書初の一と間に梅も匂ひけり  
蓬來や神代めきたる飾りもの  
片言に出来てうれしき御慶かな  
若水にさすや今年の星明り  
書初や親は机の前うし初め  
老てなほさかんなりけり弓初め  
錦着て故郷に拜す初日かな  
くもりなき御代の鏡や初御空  
初日影千年古りし雪の松  
唐崎や初日に松の雪景色  
物萬うれし初日に雪の松

○ 加藤たまも  
この年もまた豊しるしにや常盤の松に雪はふりつゝ  
老松も小松も雪のかむりして年むかへぬる清見がたかな

田中ちか

うらゝかに初日照り添ひ老松は雪のみ空に色まさりけり  
この心永久にまもれと大君は雪の常盤木はつよみにとや

よしを

霜しろき朝をかきねに匂ひけり賤が伏屋の白菊のはな  
物おもふ淋しき宵を哀にも妻こふ鹿のこみきこゆなり  
明け六つの鐘は我胸ひしくとうつ苦しき夢たえぬに

高橋白雪

二見浦しるき帆あまた朝の日に菅波すべし影しづかなり  
まろかなる月の光りに露うけて笑めるが如し河原撫子  
もろ草に絃かけ絶えず琴をひく夕風の野に舞ふや月姫

吉田玉花

やさ肩に亂れ合ひける白萩の露の涙のひやゝかき世や  
霜しるき夕べの月に古里のもらひ乳する兄きみ思ふ

\* \* \* \* \*  
新年やみどり小松は雪を澄て  
千歳榮えむの色まさりけり

白妙の冠た  
彩雲の上は年むかへぬる

投稿 隨意 伊勢白子局區内眞宮宛